

第6回 みなまた地域創生ビジョン研究会議事次第

日 時：平成28年9月25日（日）14時00分～16時00分

場 所：水俣環境アカデミア（水俣市南福寺6-1）

議事次第：

1. 開会

2. 議事

- (1) めざす地域社会像等について・・・資料2
- (2) 第5回の意見の概要報告について・・・資料3
- (3) 用語の定義について・・・資料4
- (4) マッチングポイントでの交流の目標について・・・資料5
- (5) 目標達成のための課題及び対応策について・・・資料6
- (6) 研究会報告書の骨子案について・・・資料7
- (7) その他

3. 閉会

配付資料：

- 資料1 委員名簿
- 資料2 めざす地域社会像等について
- 資料3 第5回の意見の概要
- 資料4 用語の定義
- 資料5 マッチングポイントでの交流の目標（案）
- 資料6 目標達成のための課題及び対応策（案）
- 資料7 研究会報告書骨子（案）

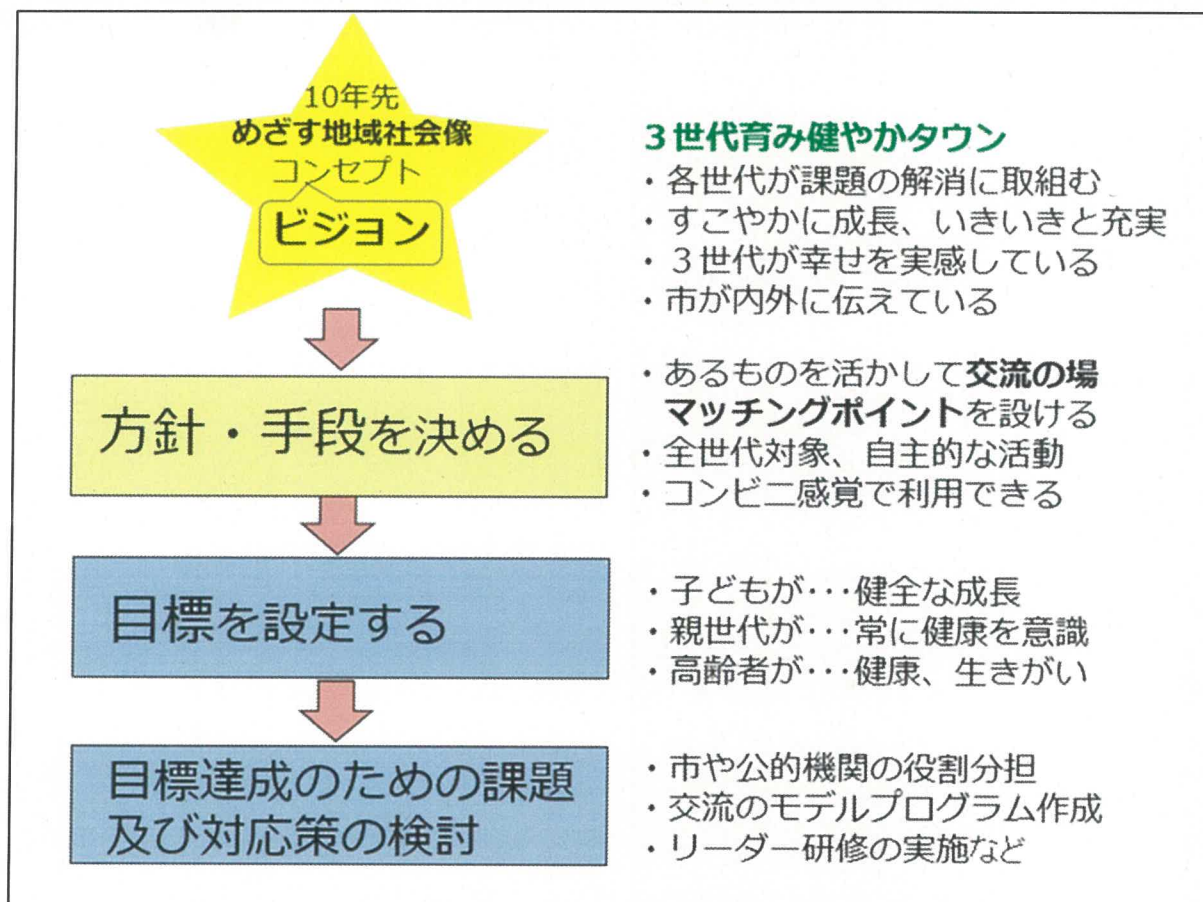
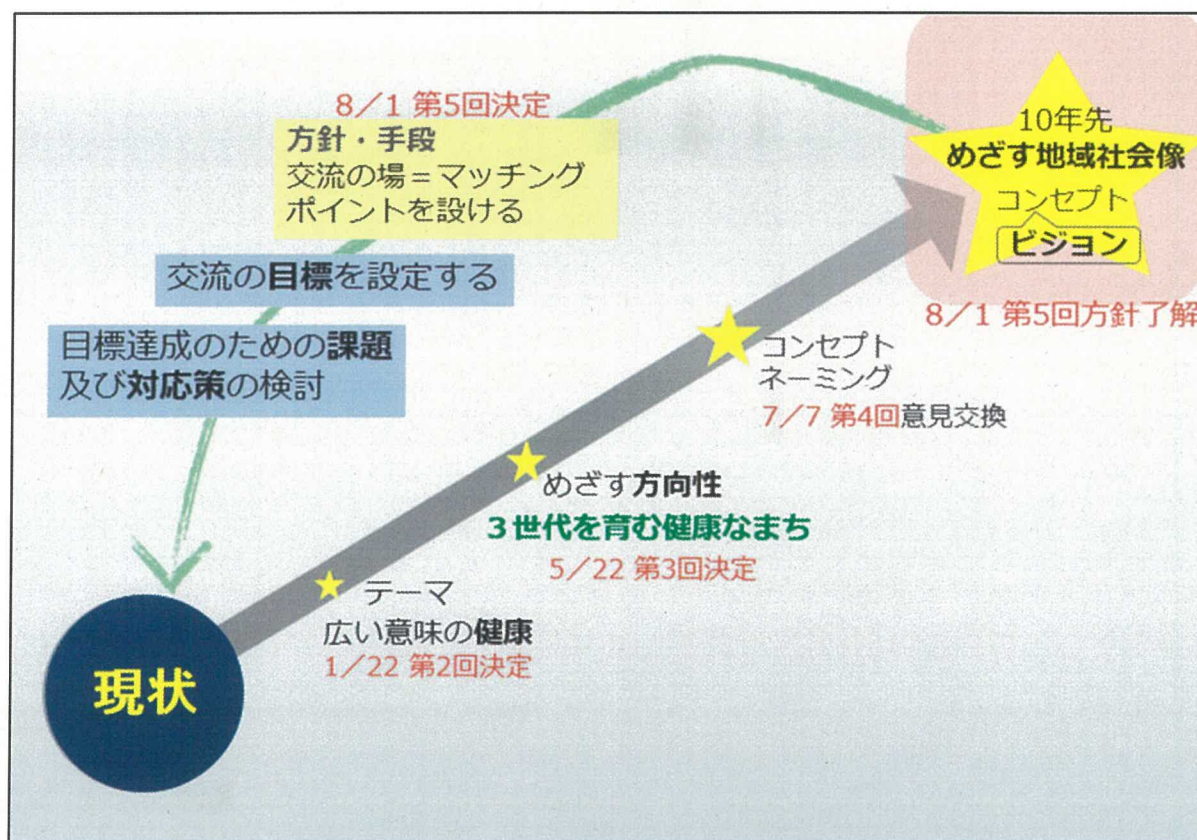
参考資料1 交流の場（マッチングポイント）の参考イメージ

みなまた地域創生ビジョン研究会 委員名簿

(50 音順、敬称略)

- 石原 明子 熊本大学大学院社会文化科学研究科准教授
- 植木 誠 早稲田大学パブリックサービス研究所招聘研究員
- 勢一 智子 西南学院大学法学部教授
- 永松 俊雄 崇城大学教授
- 深水 陽子 深水医院副院長
- 藤本 有希 一般社団法人ハートリレープロジェクト ファウンダー
- 牧迫 飛雄馬 国立長寿医療研究センター老年学・社会科学研究センター
予防老年学研究部健康増進研究室長
- 松永 裕己 北九州市立大学大学院マネジメント研究科教授

めざす地域社会像等について



3世代育み健やかタウン (コンセプト)

水俣市は、日頃からの**交流**により、3世代が幸せを実感しながら、みんなの健康（身体的・精神的・社会的な健康）をより良く**育み**、未来につないでいくまちをめざします。

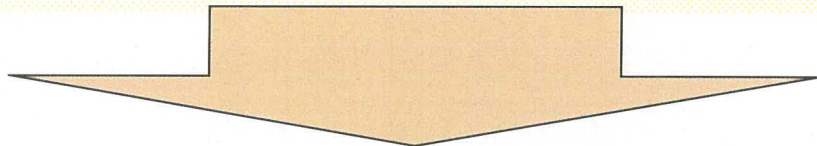
そのため、子どもや親世代が**すこやかに成長**し、高齢者が**いきいきと充実**した日々を送れるように、多種多様な交流の場を設け、楽しみながら健康を増進できるようにします。

(ビジョン)

多種多様な**交流**が日頃から重ねられ、それぞれの世代が課題の解消に取り組むとともに、楽しみながら健康を増進している姿がみられます。そして子どもや親世代が**すこやかに成長**し、高齢者が**いきいきと充実**した日々を過ごしています。

これらの取り組みを続けることにより、3世代が幸せを実感しながら、みんなの健康をより良く**育み**、未来につないでいく健やかなまちになっています。また、水俣病の教訓から「環境」と「健康」の両面に優れたまちを創りだしている市民の笑顔がこぼれています。

環境被害を受けたまちの先駆けとして、まちの魅力や市民による活動を、子ども世代につなぎ、国内外に広く伝えていきます。



ビジョンを実現する方針・手段

水俣にあるものを活かして、交流の場（マッチングポイント）を設ける。多くの市民がコンビニ感覚で、好きな所を数か所選んで気軽に利用できるようにする。

マッチングポイントでは、曜日や時間、メニューが様々な用意され、日頃からすべてのライフステージを対象とした交流が、自主的に活発に行われるようにする。

第 5 回の意見の概要

1. コンセプトとビジョンについて

① コンセプトとビジョン

「健康（身体的・精神的・社会的な健康）」のかっこ書きについて

【永松座長】

- ・コンセプトは簡潔にして、その説明をビジョンでする形になり繋がっているので、コンセプトのかっこ書きは除いてもいいのではないか。

【藤本委員】

- ・説明はビジョンにまとめて、コンセプトはすっきりさせたほうが良い。

【石原委員】

- ・ビジョンの中の「それぞれの世代の課題」のかっこ書きは、身体的健康の例が挙げられているが、その後の健康のかっこ書きは「身体的・精神的・社会的な健康」となっている。
本来、両方とも同じレベルのことを書くのではないか。
- ・個人的には、身体的・精神的・社会的な健康ということを行っているところは重要なので、コンセプトにあってもいいのではないかとも思った。
- ・「それぞれの世代の課題」の後のかっこを取るならば、ビジョンのかっこも取り、コンセプトにはっきりと、「みんなの身体的・精神的・社会的な健康を良くする」とすれば、すっきりするのではないか。

【植木委員】

- ・「健康」がコンセプトにあるほうが、おさまりがよい。

結論：コンセプトのかっこ書きを残し、ビジョンのかっこ書きは削除する。

② ビジョン「それぞれの世代の課題(たとえば低出生体重児、子どもの肥満、生活習慣病等)」のかっこ書きについて

【藤本委員】

- ・背景は、健康の課題で、基本的には、健康に対しての各世代の課題で間違いないか。

【牧迫委員】

- ・この「世代」の括弧の中の三つの並列感に違和感がある。

【永松座長】

- ・ビジョンの「健康」を視野に入れるならば、「それぞれの世代の課題」の例示も、①身体的なもの ②精神的なもの ③社会的に適切なもの、がよいのではないか。

【松永委員】

- ・あるべき姿を示したのがビジョンなので、そこに具体的な「例えば」といった話はあまり入れないのではないか。
- ・用語で少し工夫をしたほうがよい。

【石原委員】

- ・ビジョンを図るための指標や目標値をつくるということが政策上はよく行われるので、この括弧を取ってしまい、ビジョンを落とし込むところで具体化してもいいのではないか。
- ・水俣の子供の肥満や低出生児については、慎重に統計を分析したほうがよいと思う。

結論：かっこ書きを削除する。

③ ビジョン「解消を図るとともに」の表現について

【松永委員】

- ・「それぞれの世代の課題の解消を図るとともに」というところだけ、目標になっている。

【石原委員】

- ・課題の解消を図る姿が見られます、増進している姿が見られますとも読める。
増進や解消に取り組む姿が見られるということならば、これでいいのかなとも思った。

【永松座長】

- ・点で切れているという解釈と、点を含めてAとBが両方後ろにかかるのか。
- ・点を入れないと長すぎる。

【藤本委員】

- ・「図るとともに」の後に点を入れないのはどうか。

結論：「解消に取り組むとともに」にする。

④ ビジョン「水俣環境アカデミア」「水俣病資料館」について

【石原委員】

- ・具体的に水俣環境アカデミアや資料館の話に絞り込んでいるが、絞り込み過ぎなのではないか。
- ・水俣病からの再生のときに、たしか、環境・健康・経済が両立するまちという三つのKのキャッチフレーズがある。その話は置いて、この「環境」「健康」にするのか、それとも、その話を引き継いだ何かがあるのか。

【永松座長】

- ・アカデミアと資料館の二つは健康問題をほとんど扱ってないので、あえて例示する必要があるのか。
- ・上は健康のことなので、健康の施設を入れなければ偏ってしまうことにならないか。

【松永委員】

- ・要らないのではないか。

結論：「水俣環境アカデミアや水俣病資料館を活かして」を削除する。

⑤ ビジョン「水俣市」、「市」の表記について

【松永委員】

- ・「市では」というのは、水俣市という地理的なまちを指すのか、市役所（行政）なのか。
- ・「広く伝えています」になると、主語がわからない。
- ・「市役所が」ととられると、多分少し違うんだらうなという気もする。
- ・この「市では」というのが何を示していて、どう読まれる可能性があるのかが、不明。
- ・上の「水俣市」…交流するのは多分市民や地域の人たち（行政も企業も含む）
下の「市では」…「伝えています」となると、能動的に誰かがやっている感じを受ける。

【永松座長】

- ・重複を避けて「市では」と書くと、市役所がやることのように聞こえるところもある。
- ・コンセプトで「水俣市」と書いてあるので、ビジョンの「水俣市」を除いてはどうか。

【石原委員】

- ・コンセプト作りのときに、植木委員の助言で主語に「水俣市は」を入れた経緯がある。

【植木委員】

- ・コンセプトの場合で、主語を「水俣市」とするのは提案したが、ビジョンで、また、「水俣市」になるとくどい。
だから、ビジョンのほうは締めの方に水俣を使ったほうがいい。
また、三つの節があり、リライトするのであれば、この中で一番重要なところから先に入っていったほうがいい。
- ・ビジョンの最初の「水俣市では」を取ってしまって、「3世代が幸せを実現するためには」として、そこから落とし込んでいくような書き方もある。
コンセプトで言っていることを、より具体的にロードマップ的な言葉に置きかえていく。
ミクロからマクロに広げていく。
- ・この文章であれば、かっこ書きは削除して、「水俣市では」をなくしていいのではないか。

結論：ビジョンの1行目冒頭の「水俣市では」、下から3行目の「市では」を削除する。

2. 用語の定義

- ① 「3世代」の(2)の明朝体で書いてある「例えば…」 および
高齢者について

【松永委員】

- ・用語の定義というのは、一般の市民の方にわかりやすく書くのが基本。
- ・「例えば」以下は要らない。

【深水委員】

- ・高齢者に生きがいを求めなくていいとの意見があったが、65歳で高齢者なのか。
- ・今や80代はバリバリなので、高齢者にも十分、社会的貢献を求めていると思う。

【永松座長】

- ・高齢者の幅が広過ぎる。今の法律の区分けのようにになっているが、そこまで明確に説明する必要があるのかというご意見だと思う。
- ・自分で現役かどうか決める。
例:高齢者の方で車の運転などが危なくなったなと思ったときに水俣では高齢者と呼ぶ。
- ・心の豊かさというか、一種の遊びやそういう味のある取り組みも考えてみてはどうか。

【望月所長】

- ・大体これぐらいの年代なんですよというイメージがくれたらということで、一応、用語の定義を持ってきた。
そこをぎりぎり議論しても、なかなか難しいところがあるのではないか。

【岩橋室長】(補足)

- ・実際に市民の方から出たご意見をもとに、今回は、65歳ぐらいまでは多分仕事をするだろうからということで、おおむね65歳で区分けをした。

【藤本委員】

- ・勤め人は65歳くらいが区切りになるが、水俣の農業従事者や自営業者は最後まで現役だと思っている方も多いため、議論の中ではこういう区分けがあったとしても、市民へ見せるときには言葉を少し考えたほうがいいのではないか。

【石原委員】

- ・水俣モデルでは、高齢者の定義を90歳以上とするとか80歳以上にするのはどうか。
- ・高齢者申請制度。高齢者と呼ばれるのは自分で登録した人だけ。
- ・呼び方を変える。(案) 人生マイスター期、人生の達人

結論：

- ・「例えば…」は削除する。
- ・点線囲みの中「子ども・親世代・高齢者」の説明は削除する。

② 「健康」について

【松永委員】

- ・社会的な健康の説明を厚生労働白書から引用しているが、論文ではないので、ざっくりと書けばいいのではないか。

【石原委員】

- ・普通、社会的健康、社会的ウェルビーイングというときには、大体、世界中の公衆衛生の教科書などで、貧困や犯罪、差別などが無いというようにすっきり書かれている。
- ・ソーシャルヘルスのウェルビーイングの定義がはっきり書いてあるものがないか、調べ中。
- ・普通は、差別や貧困、暴力、戦争といったものがないというようなことがすっきり書かれていて、書くのであれば、そのほうがわかりやすいと思う。
- ・中学校の教科書にも三つの定義は載っている（前回の藤本委員の言）、子供も何となくわかっているのではないか。
- ・このWHOの定義は1946年ぐらいに公になっていて、今から50年以上前の言葉遣い。
- ・今の公衆衛生だと、恐らく、Social determinants of healthとか、そちらのほうで社会的健康を使っているので、公衆衛生業界も大分定義が変わったように感じる。

【望月所長】

- ・調べてみたが、ソーシャルヘルスのウェルビーイングの定義は意外とない。
- ・前半の部分はWHO協会が協会誌を出している。社会的健康の訳は出ていない。
- ・オリジナルで作るのはなかなか難しい。
- ・前半の部分を取って、つながりの希薄化の中で家族と地域のつながりについてだけを取り上げる手段もあるのではないか。

【永松座長】

- ・やや長過ぎる。二、三行ぐらいで説明しないと、多分、市民の人は読まない気がする。
- ・一般市民に配慮する必要があるので、「家族のつながり」とか「地域のつながり」という言葉を使うことにして、前段の説明部分は要らないと思う。

結論：石原委員から事務局へ情報提供を行っていただく。

③ 「いきいきと充実（高齢者）」について

【永松座長】

- ・「人の役にたち」というのは、人だけなのか、自然保護なども入らないか。
- ・高齢者の場合、常に社会に貢献する必要があるのか。
- ・「居場所を見つけて」というのも、居場所がないのが前提のようなので、「人の役にたち、居場所を見つけて」は外してもいいのではないか。
- ・「知識や技能、スポーツや趣味などを活かして」も、「スポーツ」は要らないではないか。
「知識や技能、趣味などを活かして、生きがいを感じて日々を過ごしていることをいう」という感じで、無理やり社会貢献をさせなくてもいい気がする。
- ・「すこやかに成長（子ども）（親世代）（高齢者）」の3つは、書かないという選択肢もあるのではないか。

【石原委員】

- ・ものすごく難しい言葉以外はあまり定義をしないでにおいて、市民の方に「いきいきと充実」とはどういう意味なのかを考えてもらえるワークショップをするのはどうか。
- ・そこを考えていただくのもまた住民参加というか、とてもおもしろいと思う。

結論：「すこやかに成長（子ども）（親世代）」と「いきいき充実（高齢者）」は、削除。

3. サブネーミングについて

【植木委員】

- ・「育育」 または「育々」。

《 根拠 》

- ・3世代ということは世代が重なっているわけだから、その重なりを言葉で表せないか。
- ・今までの水俣の歴史においても今後においても、一文字であらわせといったときに、育てる、育つ、育むという字が一番腑に落ちた。

《 活用例 》

- ・「いきいき育育」「3世代育育」「世代育育」「いきいき育々みなまた」「育育タウン」
- ・「育育健康みなまた市」「生き生き育育」
(「いきいき」を、生きると地域を生かすという意味の漢字に変えて「生きる」と「活きる」)
- ・その他 語呂合わせで、「地育地健」。

【永松座長】

- ・「育む」とか「健やか」というのは非常に大事な言葉。
- ・「育む」というのはやっぱりいい言葉。

結論：検討継続

4. 人材育成やポイント制について

【牧迫委員】

- ・マッチングポイントがたくさんできても、やはり人が動かなければいけない。
- ・マッチングサポーターのような形はどうか。

例：OBの教員、高校生など登録してもらい、若い世代が少ない所には高校生のマッチングサポーターを派遣する一方、上の世代の方がいてつながりがあったほうがいい所には、OBの先生に行ってもらおうなど、そういうソフトな体制も必要。

課題：ボランティアでやるのか、多少有償でやるのか。

- ・健康サポーター的なのは結構どこでもやっているの、あまりおもしろみがないが、そのように引き合わせる、マッチングをさせるサポーターという意味では、結構独自性があるのではないか。

【永松座長】

- ・具体的な施行例：マリッジサポーター

結婚率が高いところで、市長さんが任命書を渡して、世話好きのおばさんが張り切ってあちこちを回って、半ば無理やり引き合わせるなど。

- ・こういう取り組みをつくっていくこと自体を一つの生きがいとしてやってくれる人たちがあちこちに出てくると地域としても非常に活気が出てくるので、その仕掛けが重要。
- ・世話好きの方、あるいは何か新しいものをつくるのに関心がある人などに、どう関わってもらおうか。

- ・動機づけ、生きがい、趣味と思ってもらえるような仕掛けをどう考えるか。

- ・魅力があるのはポイント制。例：楽天カード

ポイントがたまったら何かに使えること自体がかなり魅力的。

健康関係でもいいが、活動するとカードできちんと貯まっていけることがあるという、単純だが、そういう動機づけのようなものも必要ではないか。

【石原委員】

- ・ マッチングポイントの工夫例の提案

水俣では環境マイスターという概念が地域再生の柱になったが、遊びというのもとても重要な概念。

例：水俣にしかない地域のいろいろな自然や財産や宝を生かした遊びクリエイター
湯出川か水俣川の上のほうから、車のタイヤに乗って川下りをするなど。

- ・ 遊びコーディネーターのようなことをやってみると、地域の誇りもしくは地域の資源も育成することになる。成功すれば、そこに外のお客さんも来てくれるのではないか。
- ・ 水俣の自然を知り尽くした人だからこそ知っている遊びがある。

それは、やったことのある世代の人に聞かないとわからない。

そういう水俣の特性を生かした遊びを見つけ、その遊びを通じて地域をつくり誇りを開発するというのもおもしろいのではないか。

【藤本委員】

- ・ マッチングサポーターのように、主だって動くリーダーをどう見つけられるかがキー。
- ・ 地元の方には諦め感のようなものもあるが、その中でも、役に立つことを子供たちに伝えていこうという高齢者の方々、また、子供たちにしても、新しい発見をもって水俣をもっと好きになる、そういうことが大事なので、それをコーディネートもしくはアテンドしてくださるサポーターをどう育成していくか、発見していくかというところが、すごく大事だと思う。

5. 具体的な施策例について

全国高校生マイプロジェクトアワード（松永委員）

高校生が、地域や社会の課題を自分事として捉え、その解決に少しでも貢献できるようなプロジェクトを自分で企画して実施するという内容。

* 水俣で実施する場合、どんな形が考えられるか

- ① そのままやるとすると、それを担う主体はどこなのという話が当然出てくるが、高校生が、主体的に自分たちのまちを発見する企画はできるのではないか。
(例) ・水俣市内の高校や中学校の授業やプロジェクトの一環としてやる。
・マッチングポイントの使い方を高校生に考えてもらう。
- ② どう使いたいのか、どう使ったら効果的と思うのかという企画の検討から関わらせることで主体性が出てくるのではないか。

島前高校魅力化プロジェクト（松永委員）

島根県の海士町：少子化のため、全国から国内留学を呼び寄せようというプロジェクト。

* 水俣で実施する場合、どんな形が考えられるか

【松永委員】

- ・子供たちが地域のことを発見できるような仕掛けを作る。
- ・自分の地域の中にずっといると気づかないことがたくさんあるので、アカデミアに来た大学生や高校生、外から来た人と交流をするポイントを作る。
- ・水俣高校もスーパーグローバルハイスクールなので、単に調べただけではなく、海外で英語で発表する場や交流する場も設けてみてはどうか。

たかはま元気 de ネット（健康自生地）（牧迫委員）

愛知県高浜市、45,000人ぐらいの規模の市における高齢者を対象とした事業。長寿研と共同高齢者の居場所として、市の中にたくさんのスポットを作り、市へ申請。市が健康自生地として認定するもの。

*** 水俣で実施する場合、どんな形が考えられるか**

- ・ 自生地自体の予算はそれほどかかっていない。
- ・ 登録したところに、それぞれ年間で数万円ぐらいの補助金を市が出し、あとは自生地自体が独自でいろいろと運営。
- ・ 規模が結構ばらばらで、小さなカフェだけを個人で運営しているところもあれば、大型店舗の薬局の一角にそういったスペースをつくって自生地としてやっているところもある。
- ・ 民間であれば、人が来てくれるだけで経済的な波及につながる可能性もあるので、市からどっぷりお金を出してという形ではやっていない。
- ・ 効果検証に関しては我々の研究事業としてやっているのだから、我々のほうから結構予算立てはあるが、事業自体にはそんなに大きなお金はかけていないと聞いている。

高校生による休耕田の復活（石原委員）

大分県で、ちょっと荒れている学校の教員の方が、その子供たちの将来や社会との再統合を考えて、高齢者と高校生と一緒に休耕田を復活するようなコミュニティーをつくっていった。継続は不明。

*** 水俣で実施する場合、どんな形が考えられるか**

- ・ 地域の高齢者と保育所の不足による地域の子供のケアを一体化するようなものがおもしろいのではないかな。

国立保健医療科学院のプロジェクト・練馬（石原委員）

成人以上の健康増進については、行政や保健師の関与がないので、
子供に健康教育を学校で行い、学校で習ったことを帰宅後にお母さんたちに話すような、
子供から親が学ぶ健康づくりの事業。

* 水俣で実施する場合、どんな形が考えられるか

- ① 水俣のアイデンティティと誇りの復活について、子供を通じて高齢者や大人の世代に働きかけてもいいのではないか。
- ② 水俣発祥の地元学のプロジェクト。
 - ・地域の若い人と地域の外の若い人が組んで、水俣の歴史や地域のさまざまな財産を知っている高齢者や大人に聞き取りをし、地域の絵地図を作る。
 - ・そこから地域にある財産を使って大人と子供と一緒に商品を開発。
 - ・マッチングポイントの案を、大学生などの若い人も含めた水俣の中の子供と、外の子供と、水俣の大人・高齢者がやる。

ふるさとみなまた夏休みいなか学校（藤本委員）

夏季におこなう通学型のサマースクール。

* 水俣で実施する場合、どんな形が考えられるか

- ・若年層に教える能力をお持ちの先生は多分大勢いるので、そういった方たちに積極的に参加していただければ、それが高齢者の生きがいにもつながる。
- ・そういう先生は、横のつながりで地元の同じ世代の同級生もお持ちでいらっしゃるの、そういった方々をうまく巻き込んでくださるような形になるのではないか。

3世代による日曜学校のようなもの（提案）（植木委員）

日曜日に3世代の人たちが集まって開く学校。

イギリスなどでよくやっているヘリテージ教育のようなもの。

* 水俣で実施する場合、どんな形が考えられるか

- ・地域の誇りを、おじいさんが子供に、その場所に連れて行って説明していき、最終的には、シチズンシップ(市民教育)につながって、能動的な学習を日曜学校でやる。
- ・以前お話した、リレーというキーワードは、子供にとってはアクティブ・ラーニングになっていくし、活動としてはシチズンシップ的なヘリテージ教育につながっていくようなものができたらいいのではないか。

用語の定義

各用語の定義は、以下のとおりとする。

・ 3世代

- (1) 3世代とは、胎児～高齢者まで、すべてのライフステージを対象とし、子ども・親世代・高齢者の3つに大別する。
- (2) 3世代というのは、現在の3世代とともに、未来の世代にもつないでいくという意味がある。

・ 育み

育みとは、子ども・親世代・高齢者が「交流」による相乗効果により、それぞれの課題（たとえば低出生体重児、子どもの肥満、生活習慣病など）の解消を図りつつ、健康（身体的・精神的・社会的な健康）を増進していること。

・ 健やかタウン

健やかタウンとは、顔の見えるコンパクトな環境のまちで、3世代の育みにより、幸せを実感しながら、みんなの健康（身体的・精神的・社会的な健康）を未来につないでいくまちをいう。

・ 健康

健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいう（日本 WHO 協会訳）。

なお、社会的な健康については、……

（石原先生から情報提供の予定）

・ 多種多様

多種多様とは、数や種類が多いさま、バラエティに富む状態をいい、水俣市民をはじめ、周辺の市や町、国外からの研修生や留学生などにも開かれた交流がフレキシブルに行われることをいう。

・交流の場（マッチングポイント）

交流の場とは、3世代の人たちが互いに行き来し、さまざまな物事のやりとりが行われる場をいう。水俣市内のあちこちに、水俣にあるもの（場、人、しくみ）を活かして、多種多様に設けられ、曜日や時間、内容が様々に用意されていて、コンビニのように好きな所をいつでも気軽に利用するイメージ。このような場を、交流の場（マッチングポイント）と称する。

マッチングポイントでの交流の目標（案）

○子ども

他世代と多くの関わりの中で、愛情や信頼感、やさしさや思いやりを強くもつようになり、地域での思い出や実体験を重ねて成長できるようにすること。

○親世代

子どもとの遊びなどを通じて健康増進にも努め、健康診断や保健指導を受診するなど、常に健康を意識するようにすること。

○高齢者

自らの健康に配慮しつつ、知識や技能、趣味などを活かして、好きな所を見つけて、生きがいを感じながら生活できるようにすること。

目標達成のための課題及び対応策（案）

凡例) 目標達成のための検討事項
→対応策

①実施にあたり必要なこと

- ・スタートアップ支援
→利用者や事業者に分かりやすい成功ポイントを3つ程度つくる。
公と民それぞれ
- ・リーダー、担い手の確保
→リーダー、担い手にやりがいをもたせる（動機づけ）、育成方策の検討
マッチングサポーター登録制（OB 教員や高校生）
OB 教員の活用、口コミで同級生を巻き込む
→地域の誇りを、おじいさんが子供に、その場所に連れて行って説明し、
最終的には市民教育にひろげる。日曜学校。
- ・みなまた地域の特色を活かしたマッチングポイント
→例：白梅＝老人ホーム＋保育園
深水医院＝定期健診に来た高齢者＋幼稚園
- ・いかに続けるか
→高校や中学校の授業やプロジェクトの一環として行う。
- ・みなまた地域の特色を活かす
→地域の自然財産を活かした遊びの発見、遊びを通じて誇りを開発
やったことのある世代からの情報収集
- ・交流メニューの準備
→モデルプログラムの作成
→マッチングポイントの使い方を中学生や高校生に考えてもらう。

- ・参加者がその気になるための方策
 - ポイント制
 - 中高生に企画段階から入ってもらう

- ・子どもが参加したくなるものにする
 - 楽しい、おもしろい

- ・高校生、大学生の活躍の場をつくる
 - 地域内外の若者・子どもと、水俣の大人・高齢者で発案する。
 - どう使いたいか、どう使ったら効果的と思うかという企画の検討から関わってもらう。

- ・必要経費
 - 健康自生地のように小額でも予算が必要

②マッチングポイント間の相乗効果を考える

③市や公的機関に期待すること

研究会報告書骨子（案）

はじめに

1. 本研究会の目的
2. 検討の経緯
3. いま、みなまた地域の地域創生を議論することの意義

I みなまた地域の創生に向けて「健康」に焦点をあてることの意義

- ・次世代に引き継がれる健康課題（市健康増進計画を引用）
- ・社会的な健康ともやい直しの未来形
- ・3世代を育む健康なまちへ
- ・新たなイメージの創出

II みなまた地域の情勢

1. 社会の変化（以下の明朝体は構成イメージ）
 - 家族・地域社会の変化に伴い複雑化する支援ニーズ
 - 誰もが支え合う地域の実現の必要性
 - みなまた地域における問題意識
 - みなまた地域の課題
2. 地域で求められていること
 - 安心、安全の確立
 - 次世代を育む場としての地域
 - 市民の声、アイデア
3. 住民の自己実現意欲の高まり

III 検討の視点とめざす方向性

1. 検討の視点
2. みなまた地域でめざす方向性
 - 地域の特徴とめざす方向性

地域づくりの視点

IV みなまた地域でめざす地域社会像の構築

1. 3世代育み健やかタウン

コンセプト

ビジョン

2. 用語の定義

V 3世代育み健やかタウンを推進するための方策

1. マッチングポイントの設定

マッチングポイントでの交流の目標

マッチングポイントの参考例

マッチングポイントにおける工夫

2. マッチングポイントを推進するための環境

情報の共有

交流のための環境

活動資金

3. マッチングポイントで核となる人材の育成

リーダー、担い手の確保

リーダー等の育成

4. 市や公的機関の役割

市の役割

公的機関の役割

VI 目標を達成するための課題及び対応策

1. 当面の実施にあたり必要なこと

スタートアップ支援

リーダー、担い手の確保

みなまた地域の特色を活かしたマッチングポイント

いかに続けるか

みなまた地域の特色を活かす

交流メニューの準備

参加者がその気になるための方策
子どもが参加したくなるものにする
高校生、大学生の活躍の場をつくる

2. 将来マッチングポイント間の相乗効果を考える
3. 市や公的機関に期待すること

VII 国内外への情報発信

1. 新たなイメージ像の構築
2. 情報発信
 - 国内への情報発信
 - 海外への情報発信

VIII 留意すべき事項

1. 多様性を認め画一化しない
2. 個人情報の取扱い

IX 資料

みなまた地域創生ビジョン研究会設置要綱
みなまた地域創生ビジョン研究会委員名簿
みなまた地域創生ビジョン研究会検討の経緯（議事概要）
みなまた地域創生ビジョン研究会意見交換の概要（第1回～第〇回）
水俣フューチャーセッションによる地域の未来像（交流関係）
参考事例の紹介
参考文献等

あとがき